「語句・形式の欠落」の改善における「格枠組み」の教示の有効性
ー特定と訂正においてー

李強楠
関西大学
外国語教育学研究科M2

研究背景

- 「語句・形式の欠落」　例：彼の復讐はもっと徹底的に暴いていた。
- 「語句・形式の欠落」について「述語に必要な語句や形式が欠落し、主語と述語が対応しなくなったものである。」　（松崎2022）
- 「語句・形式の欠落」　の特徴：一瞥すれば問題がないように見えるが実際、主語と述語がうまく噛み合っていない。
- 国語教育においても日本語教育においても「語句・形式の欠落」は教育における難点の一つである。

研究目的

- 「語句・形式の欠落」の減少と予防において、学習者の特定・訂正能力の向上に「格枠組み」の教示が有益であるという仮説を検証する。

前期実験10人：問題文群の順番（ ABC ）
後期実験10人：問題文群の順番（ CAB ）

研究概要

30分	30分	30分	30分	30分
被験者(中国語母語話者20人)	被験者の日本語能力 / TTBJ得点を基準としたグループわけ	事前テスト段階 問題文群A（問題文群C）	教示段階	直後テスト 問題文群B（問題文群A） / 遅延テスト 問題文群C（問題文群B）
初中級日本語学習者（N3～N2）	TTBJ（文法90）テストによる測定	グループ1・グループ2に均等に被験者を振り分ける	教示前、両グループの特定・訂正能力の測定	グループ1には「構造法」グループ2には「記憶法」 / 教示の直後、両グループの特定・訂正能力を測定し比較する。 / 一次実験の3週間後、両グループの特定・訂正能力を測定し比較する。

一次実験2時間　　二次実験30分

格枠組みと深層格の役割

一、格枠組み：
「ある動詞が取る必須補語のリストをその動詞の格枠組みと言います」庵（2018）

例文：　昨日　森さんは　小野さんが　作った　美味しそうな　ケーキを　食べた　よ。

副次補語 | 必須補語 | 副次補語 | 副次補語 | 副次補語 | 必須補語 | 述語 | 副次補語

したがって、一つの文は文単位である限り、いくら長くても、どんな複雑な構造を持っても、その文の「格枠組み」は必ず一つの簡単な単文にすぎない。

格枠組の役割：構造が複雑で長い複文 →「格枠組み」の取り出し→ 簡単な単文

「語句・形式の欠落」の特定がより易くなる。

二、深層格（意味役割）：　森さんは　ケーキを　食べた。

主格（動作主）　与格（対象）　述語

「深層格」を付けたうえで、述語との呼応関係を判断する。

「語句・形式の欠落」の場合：森さんの　夢は　ケーキを　食べる。

明らかに「夢」は「食べる」の動作主になれない

副次補語　主格（~~動作主~~）　与格（対象）　述語

「格枠組み」の概念と深層格の概念はそれほど難しい概念ではないため、教示により、学習者が自力で格枠組みを取り出し、ある程度の深層格を付けられるようになると十分に考えられる。

「格枠組み」の概念を用いた「構造法」の教示のプロセス

「格枠組み」の表層格と深層格の説明

例：　森さんは　ご飯を　食べる。
「主語（動作主）」は　「対象」を　「述語（食べる）」

教示内容：骨組＝「文の最低成立条件」とは何か

例：政府・日本銀行は　「伝家の宝刀」を　再び　抜いた。
主語（必須）　対象（必須）　副次　述語

教示内容：主節と従属節の概念

例：　先生は　騒いでいる　生徒を　叱った。
主節　従属節　対象　主節

教示内容：複雑な複文における骨組（格枠組み）の取り出し

例：盛岡セイコー工業は、地方創生および持続可能な地域社会の実現に向けた活動を協働で推進することを目的とした包括連携協定を締結した。

教示内容：骨組（格枠組み）を取り出す目的

例：長い文・複雑な文をシンプルにしたうえで、主述が意味役割のレベルで、対応しているかを判断する。

「格枠組み」の概念を用いた誤文訂正の教示

問題文例：私たちの仕事は、子供に対し、個々の発達の状態や障害特性に応じて、合理的に配慮した上で、子供の将来の自立を目指して、支援する。

①格枠組みの取り出し：仕事は　自立を　支援する。
②意味役割の付与：　主語（動作主）　対象　述語（動作）
③意味役割のチェック：仕事は　自立を　支援する。
主語（~~動作主~~）　対象　述語（動作）
④適切な主述を当てる：①私たちは自立を支援する。
②仕事は自立を支援することです。

到達度を確認するためのテスト

問題文例：私の将来の夢は、おいしいケーキを売る店を作って、多くの人にケーキを提供する。

判定基準

判定基準：各段落の各文の主語と述語が深層格（意味役割）のレベルで噛み合っているか

判定基準としている訂正例：

「誤→正」例：「私の夢は歌手になる」→「私の夢は歌手になることである」

本来の問題文は実験協力者の訂正により、主語と述語の対応関係が整えられた。

「正→誤」例：「私の夢は歌手になることである」→「私の夢は歌手になる」

本来の正しかった文は実験協力者の訂正により、主語と述語の対応関係が崩された。

以上の基準をもとに、計算した各問題文群の構成

問題文5つ　正しい文13つ
→ 各問題文群

調査材料

コーパス → 「語句・形式の欠落」を含む段落の抽出 → 「語句・形式の欠落」と関係のない誤用や不自然なところの修正

抽出された段落例：

彼が逃げ出した後で、彼の人生の主な目標はかつての家族、恋人、恩人、そして敵を探していた。自分の独特の方式でかつて、助けらてた船家の一家に、できるだけ、黙ってサポートして、でも、自分が恩返しのために来たのを知らせないで、そのままずっと努力していた。(c42-3)

修正された段落例：

彼が逃げ出した後、彼の人生の主な目標は、かつての家族、恋人、恩人、そして敵を探し出す。さらに、彼は自分だけの独特な方法で船家の一家を黙ってサポートし続けている。彼は恩返ししたことを知らせず、黙々と努力を続けている。

「語句・形式の欠落」以外のところが正確であるかを母語話者（3人）に確認してもらう。

「構造法」の教示をうけた学習者（5人）を対象とするテストで訂正率の低い段落を除外する。

残された15の段落を「日本語文章難易度判別システム」で難易度を判定する。

5つの問題文段落と1つの正しい段落を問題文群「A」「B」「C」に振り分ける。

問題文群A　問題文群B　問題文群C

「記憶法」の教示のプロセス

主節と従属節の概念の説明

「構造法」にある「格枠組み」と「深層格」概念の教示だけを除き、問題文と訂正案を暗記させる。

問題文例：私たちの仕事は、子供に対し、個々の発達の状態や障害特性に応じて、合理的に配慮した上で、子供の将来の自立を目指して、支援する。

訂正案（1）：私たちの仕事は、子供に対し、個々の発達の状態や障害特性に応じて、合理的に配慮した上で、子供の将来の自立を目指して、支援することである。

訂正案（2）：私たちは、子供に対し、個々の発達の状態や障害特性に応じて、合理的に配慮した上で、子供の将来の自立を目指して、支援する。

到達度を確認するためのテスト

研究課題

課題：「語句・形式の欠落」の減少と予防において、「格枠組み」の概念が有用であるかを明らかにするために、以下の仮説1,2を立てた。

＜仮説1＞直後テストの段階では、「構造法」の教示を受けるグループ1得点は「記憶法」の教示を受けるグループ2の得点を上回ると予測する。

＜仮説2＞遅延テストの段階では「記憶法」と比べれば「構造法」の教示維持効果がより強いと予測する。

TTBJテスト結果

表1 被験者の日本語能力（平均値）

グループ（20人）	初級項目	中級項目	上級項目
グループ1（10人）	25.9	20.4	10.8
グループ2（10人）	23.7	19.2	10.7

①初級項目の結果は正規分布に服従していない。2個の独立サンプルの検定を行った結果，条件間に有意な差は得られなかった（p=0.117>0.05）
②中級項目と上級項目の結果に対して独立したサンプルのt検定を行った結果，ともに、条件間に有意な差は得られなかった。
中級項目：（t(10)=0.738, p=0.235>0.05）
上級項目：（t(10)=-0.448, p=0.330>0.005）

統計上、グループ1とグループ2の間には、明らかな日本語能力の差が認められないと言える。

実験結果

図1　グループ1、2合計（誤→正）プロット

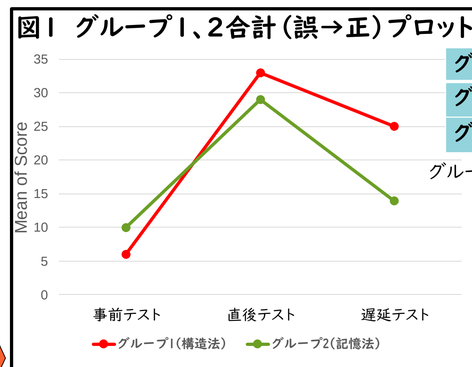

表2　初中位グループ1、2合計（誤→正）

グループ（20人）	事前	直後	遅延	後-前	遅-後	遅-前
グループ1（10人）	6	33	25	+27	-8	+19
グループ2（10人）	10	29	14	+19	-15	+4

グループごとの問題文総数（50）、「後-前」、「遅-後」、「遅-前」は引き算である。

結果1：「構造法」の直後教示効果がより高い。
図1が示した通り、事前テストの段階では、グループ2の得点が高かったのに対し、直後テストの段階ではグループ1がグループ2を上回ったと言える。

結果2：「構造法」の教示維持効果がより高い。
図1から、グループ1とグループ2の合計得点がともに、下降傾向を見せたが、グループ1の合計得点はグループ2を大幅に離していることが分かる。

図2　グループ1、2合計（誤→正）プロット

表3　初中位グループ1、2合計（正→誤）

グループ（20人）	事前	直後	遅延	後-前	遅-後	遅-前
グループ1（10人）	0	6	4	+6	-2	-2
グループ2（10人）	0	8	2	+8	-6	-6

グループごとの正しい文総数（130）

結果3：図2が示した通り、「構造法」と「記憶法」の教示による負の影響はともにあるが、基本的に、メリットがより多いと考えられる。

フォローアップインタビュー結果

結果1：「語句・形式の欠落」に対する違和感
事前テストの段階で「語句・形式の欠落」を含む問題文に違和感を覚えたが文のどこに問題があるかが分からないと述べた被験者が少なくなかった。

結果2：「深層格」による「母語の影響　」の改善

問題文例：
インターネットの特徴は、だれでも自分の思うことが発表できる。

母語の影響：
問題文を順延する前の前期実験の事前テストにおいて、上記の問題文を中国語に翻訳し、問題がないと判断した被験者は多かった。

「深層格」による改善：
問題文を順延した後の後期実験の直後テストにおいて「構造法」の教示を受けたあと、同じ問題文の主語と述語の深層格を付けることで、「特徴は何かを発表することができない」と判断し、問題があると判断した被験者が多かった。

考察

本研究では「語句・形式の欠落」の改善と予防において、「格枠組み」と「深層格」の概念が有効であるかを明らかにするために、検証実験を行った。

実験結果から明らかになったこと：

(1)直後テストの結果から、「記憶法」と比べれば格枠組みと深層格の概念を用いた「構造法」の教示はより有効であることが分かった。

(2)遅延テストの結果から「構造法」の教示より高い維持効果を見せたことが分かった。

(3) 30分の教示時間が見せた向上効果から「格枠組み」と「深層格」の概念はシンプルで理解しやすいものであることが分かった。つまり、「格枠組み」と「深層格」の概念を用いた教示が効率的で、学習者にかける負担が少なくメリットが多いと言えるだろう。

今後の課題

(1) 2要因分散分析を行おうとしたが、今回の実験の被験者の数、問題文の数が少ないため、統計上の結果が出せなかった。今後の課題として、問題文の数と被験者の数を増やしていく必要がある。
(2)「格枠組み」と「深層格」の概念は難しい概念ではないが、一回の教示で、学習者が完全に習得できたとは言えない。

資料

『JCK作文コーパス』科学研究費補助金「テキストの結束性を重視した母語別作文コーパスの作成と分析」（2013 年度～ 2015 年度基盤研究（C），研究代表者：金井勇人）
『日本語学習者作文コーパス』「自然言語処理の技術を利用したタグ付き学習者作文コーパスの開発」©2010科研グループ
『現代日本語書き言葉均衡コーパス中納言版』（BCCWJ）「国立国語研究所言語資源開発センター」
『日本語学習者作文コーパスなたね』 ©2002-2014 Hinoki プロジェクト
『筑波日本語テスト集（TTBJ）』「筑波大学留学生センター」『日本語文章難易度判別システム jReadability』

参考文献

庵功雄（2018）『新しい日本語学入門』「第2版」，スリーエーネットワーク.
庵功雄（2018）『一歩進んだ日本語文法の教え方2』，くろしお出版.
高梨信乃・ 齊藤美穂・朴秀娟・太田陽子・庵功雄（2017）「上級日本語学習者に見られる文法の問題:修士論文の草稿を例に」『阪大日本語研究』29, pp.159-185大阪大学大学院文学研究科日本語学講座.
松崎史周（2022）「中学生の作文における「主述の不具合」の出現状況」『国士舘人文学』12, pp.1-14国士舘大学文学部人文学会［編］.
楊帆(2014)「中級日本語学習者の作文における困難点 ―文構造の呼応関係について―」『秋田大学国際交流センター紀要 3』pp. 15-28. 秋田大学国際交流センター.